

## ●第15回 全国X線CT技術サミット

# ワークショップ：臨床技術のinnovation ——新しい技術の現状と課題

### 座長集約

昨今、CT界におけるソフト、ハードは常に進化しており、われわれの技術力はそれについていけない場合が時にある。すなわち、CTそのものに振り回され、誤った方法で検査を実施してしまうようなことを回避するため、また、進化したCTの特長を引き出すための情報源として、当サミットは存在を主張するものとする。今回のテーマの“新しい技術の現状と課題”は、進化し続けるCTを取り扱うためには必要不可欠な情報であると考え。このワークショップでは、最新機器に伴う特殊検査をルーチン化している施設からの報告であり、最新技術に伴い、画像評価法もさらに次世代へ突入したと思われるほど、きわめて理解が難しい世界へ導かれた気がする。筆者を含め聴講者においても、大多数が未知の世界に足を踏み入れた感じのセッションであった。

このワークショップは5施設からの報告であり、唯一機器に関係しないテーマであるCT colonography (CTC) について済生会熊本病院の坂本 崇氏が発表した。CTCは、特異性のある専門分野と侵襲性があることから、院内での連携とCTCを実施するためのルールに基づく取り決めなどが整備さ

### 座長集約

今回のサミットもとても熱い一日であった。開催地、福岡の猛暑もあったが、会場に参加した方のCTに関する熱意もあったからだと感じている。それは、テーマである「CT innovation」を反映した新しい臨床技術に関する内容が満載であったからであろう。その中で、本ワークショップは「新しい技術の現状と課題」をテーマとして、CT colonography (CTC)、膵臓のperfusion、320列面検出器CTを用いた肺動静脈分離、そしてdual energy/monochromatic imagingと、まさに新しい技術が満載の内容であった。

新しい技術の導入には、その技術を施行できるCT装置が

石風呂 実 広島大学病院診療支援部高次医用画像部門

れないといけないため、聴講者の大半は実践していないのが現状と考える。しかし、坂本氏の報告では、CTCは今後は有用性が上がる検査の1つとも考えられる内容であった。京都大学医学部附属病院の小泉幸司氏は、重症膵炎の症例を中心に64列CTによる膵臓のperfusionの有用性を示唆する発表であった。藤田保健衛生大学病院の井田義宏氏は、最新機器である320列CTならではの、肺動静脈を分離して撮影できる最大の特長を生かした、特殊造影法と低線量の組み合わせによるシネスキャンの有用性の報告であった。残りの2題は、monochromatic imagingの内容で、2管球システムについては金沢大学附属病院の高田忠徳氏、1管球システムについては大阪大学医学部附属病院の佐藤和彦氏が報告した。

以上、5題のうち4題は機器による性能が中心となる紹介であり、機器のない施設においてはこのような進化した検査は現状できないが、今後の機器更新などの選定基準として参考となったと感じる。また、同機種を所持している施設においては、今後のCT検査の活用の一助となり、臨床の幅を拡張できる内容であったと考える。

平野 透 札幌医科大学附属病院放射線部

必要になるが、それが臨床の現場で役に立つ効果や結果を得るには、ユーザーである現場のスタッフの創意工夫や、運用していくための関係部署との連携が必要であることなど、聞いている方に再確認させることができたのではないと思われる。さらに、新しい技術を院内で普及していくには、現場の診療放射線技師の情熱と、将来を予測または期待する資質が必要なのだと感じた。現場で働くわれわれは、技術を惜しむことなく活用し、新しい何かを見つけることを目標にすることも重要と思われる。そしてそれが、必ず誰かのためになると信じている。